

東海道編

朝日～来女

発行 / 四日市観光協会
〒510-0075
三重県四日市市安島一丁目1-56
TEL.059-357-0381
http://kanko-yokkaichi.com/
E-mail:kanko@m3.cty-net.ne.jp

2009年9月第4版発行



四日市宿
市庭と湊から発達した東海道43番目の四日市宿。16世紀頃にはすでに四のつく日には市が開かれていた。徳川時代には海上十里の渡り、尾張の宮宿(熱田)まで船の便があり、交通の要所だった。

街道よもやま話
東海道は江戸日本橋から京都三条大橋間の約125里(約500km)。旅人は、朝4時頃に宿を立ち、夕方6時頃まで一日平均約10里、12～15日で歩いたという。



⑥手差しの道標
本来は「江戸の辻」にあったものを、複製したものである。「すぐ江戸道」「すぐ京いせ道」と刻まれており、さらに丸の中に人差し指で方向を示す手が彫られているユニークな道標である。

⑦三滝橋
三滝橋を渡ると四日市宿に入る。安藤広重の描いた三重川は、この三滝橋あたりだとされている。当時は、川遊びや夕涼みなどの憩いの場であった。

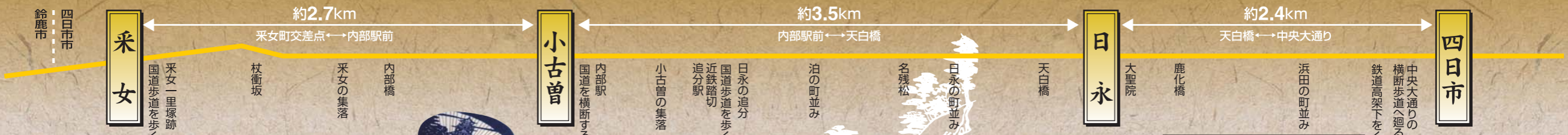
⑧志氏神社
享保10年(1725)の鳥居や、文政元年(1818)・天保10年(1840)の常夜燈がある。この神社の狛犬(市指定文化財・S31.2)には、神様が留守を守るように言いつけたにもかかわらず、遊びに出かけてしまったためそれぞれ左右の前足を折られてしまったという伝説が残る。また、街道沿いの鳥居近くには、撫でると良縁が成就するという夫婦石がある。

⑨善教寺
善教寺には、二つの国指定重要文化財(S34.12)がある。阿弥陀如来立像は、鎌倉中期の作で、木造松材寄木造りで、玉眼・漆箔を施こした優美なもので、像高79cm。また、胎内納入文書とともに、胎内佛として約800体の摺仏が発見されている。

⑩長明寺
文治年間(1185～90)に蒔田相模守宗勝が居城した蒔田城跡といわれ、境内は素掘りの環濠に囲まれている。北側に隣接して観音堂があり、堂内の厨子には見事な龍の彫刻がみられる。桑名城より移築の山門、天文3年(1738)刺違切腹の薩摩義士の墓など。

⑪宝性寺
本堂が市指定文化財(S52.10)。木造二重屋根御堂造瓦葺で、上棟木札によると、享保4年(1719)己亥6月建立。現在の本堂は、瓦の銘に文化11年(1814)とある。

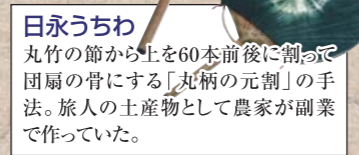
⑫富田一里塚跡石標
三ツ谷・日永・采女とともに、東海道の四日市における一里塚跡のひとつ。(県指定文化財・S12.11)



17 芭蕉の句碑
宝暦6年(1756)建立。昭和51年移築。「笈の小文」の旅でここを通った芭蕉が残した「歩行(かち)ならば杖つき坂を落馬かな」の句が刻まれている。これは、馬で登ろうとしたが、坂が急なため馬の鞍とも落馬したことを詠んでいるといわれる。



16 杖衝坂
東海道では、箱根、鈴鹿峠に次ぐ難所のひとつで、日本武尊が東征の帰りに極度の疲労のため腰の剣を杖にして登ったという急坂。



日永うちわ
丸竹の節から上を60本前後に割って団扇の骨にする「丸柄の元割」の手法。旅人の土産物として農家が副業で作っていた。

街道よもやま話
「東海道中膝栗毛」の弥次さん喜多さんが参宮のため伊勢へ向かったが、日永の追分の茶店で金比羅参りの男と名物饅頭の食べ合いの賭けをする事になった。結局、食べ合いに負け大金を巻き上げられてしまうが、男は手品師で餅を袂に入れ込んでだまされたというエピソードだ。



14 名残松
昔は300本余りも続く松並木だったといわれているが、現在は、街道筋に1本だけ残っている。



日永の追分は、三方を道路に囲まれた、一段高い場所に建っている。近所の人達がポリタンクを提げて沸き水を汲みにきていた。休憩も兼ね、喉を潤した。

追分駅の踏切でエンジ色と橙色の小さな電車を見た。ローカル具合がいいね。

道標がアスファルトに半分埋もれていて肩身が狭い。左追分とある。



18 血塚社
采女の杖衝坂を登りきったところ。鳥居の奥にある血塚の祠は、日本武尊の血で染まった石を集めて葬ったと伝えられている。



15 日永の追分
東海道と伊勢街道の分岐点となったところ。茶屋や旅籠が並び、間の宿としても栄えた界隈。京都へ往來する人はここで伊勢神宮を遥拝した。(県指定文化財・S13.4)



10 鈴木薬局
嘉永5年(1852)に建てられた、風格のある製薬所である。土蔵とともに膏薬をつかった作業場があり、薬研などの貴重な道具が保存されている。

崇顕寺は作家丹羽文雄が生まれたお寺だ。「鮎」で高い評価を受け、ふるさと四日市を描いた「葉の花時まで」など数多くの名作を世に出している。



9 浜田の町並み
当時は、千鰯屋、材木屋、紙屋をはじめ、餅などを売る水茶屋があって賑わっていた。今も街道に沿って、連子格子の古い民家が軒を連ねており風情が残っている。



11 大聖院
源頼義が定朝に刻ませた、不動明王立像(国指定重要文化財・T4.8)がある。木造桧材一本造りで、不動明王独特の牙がなく、並びのよい上歯で下唇をかみしめておられ、気品のある形相と柔和なお姿は慈悲心のおふれを感じさせる。像高95cm。



13 日永一里塚跡石標
江戸からちょうど百里にあたる日永一里塚跡石標(県指定文化財・S13.4)が、建物と建物の狭いところにやや傾き加減に建っている。かつては9m四方、高さ2.5mの盛り土の塚が街道の両側にあった。



12 日永神社
日永神社の境内に明暦2年(1656)の銘が入った、東海道に現存する最古の道標がある。僧侶が伊勢参宮の人々のために建てたもので、元は日永の追分にあったようだ。

杖衝坂の坂上の家々の姓は「坂上」さんである。地形が反映されているのかな?

そろそろ四日市ともお別れだ。国道一号線と合流するあたりで振り返ると四日市市街がよく見える。采女一里塚跡の石標を国道の反対に見て鈴鹿へと進む。

気合を入れて、杖衝坂に挑戦だ。息が荒くなってくるが、隣を小学生が「こんにちは」と通り過ぎる。あ、軽やかな足がうらやましかったが、登りきると案外たいした事ないな。

三重の名の由来
「古事記」によれば、東征の帰路、伊吹山に登って病にとりつかれた日本武尊は、「三重の村」にさしかかったとき、「私の足は三重に曲がってしまった」と嘆き、このことから「三重」という地名が付けられたという。

「東海道五拾三次 四日市」歌川広重